

# 小十郎と千代 (4)

## 松永ひろし

2022.10

しんぱいごと	1
白い花	2
庄左衛門屋敷	4
東一華?	5
本草学	6
信濃の庄左	7
黄蘗(キハダ)	8
美寿々寮	9
梁山泊	10
信濃本草学	11

### しんぱいごと

十九歳の剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、水仙が白い花をつけたはねつるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。小十郎が又右衛門を師と敬うを幸

いに、平気で小十郎に無理難題をいう。千代が訊いた。

「ふくじゅそつのはなは おわりだな。ちいさなみどりのつばつばは たなか?」

「はい、種です。ただ、福寿草の種は、蒔いても花が咲くまで長い歳月が要りようとか」

「ちよは まてん。かんたんに ふやせんか」

「知りあいの花好きは株を掘りだし、分けて鉢に植えています。福寿草は新年早くに花が咲きますし、縁起のよい名ですから、他所さまにあげるとよろこばれるんですよ」

「あたしやまの ふくじゅそつも ひとつが かぶをわけて あれほどに ふやしたのか」

「愛宕山のものは無作為に生えておりましたから、おそらく地面にこぼれた種が自然に芽生えたものでありまじゅい」

「ぬすまねるにこま なかつたのじゃな」

「ええ。盗るなら愛宕山に行かすとも、里の畦など身近に福寿草が群れております」

「なら あたしやまの ふくじゅそつは あんしん

して さくことができるな」

「ただ、花がふえてさらに見事となれば、それなりの人が見に行きましよう。さすれば花や株が踏み荒らされるかもしれないせぬ」

「うれしいことには しんぱいごとが つきまのか。そつだ、きのう むかいのいえから おはぎをたくさんもらったとき、ははづえは うれしいけどぶとつてしまつと しんぱいなされたぞ。それもそのようなことだな」

小十郎はさて、それはと口もらう、  
「おそらく千鶴さまのおたむびれでしよう。おはぎをたべて太ったとは聞きませぬ」

「じゅつるつ、そつと ははづえに もつすな。ははづえが なやんでたべぬまに ちよが ぜんぶたべてしまつのだ」

### 白い花

桜木小十郎に念を押した千代がいった。

「じゅつるつ。あたしやまへ こくやく

「愛宕山になにかございますか」  
 「なにがあるか、みに、ゆくのじゃ」  
 「この時期、なにがありますかな」

千代は赤い着物のたもとを翻しながら小石まじりの土道を駆けた。小十郎が後を追う。

浅間神社の南東で寺沢にかかる木橋を渡り、金剛寺参道への分岐を直進すると、その先の左に二尺あまりの石地藏が祀られている。その右脇の径が愛宕山頂に至る登山道だ。半町ほど登れば福寿草の群生地がある。が、

(おそろく愛宕山の福寿草も花は終りだろ)

と考えた小十郎は、石地藏の前でしゃがみこんだ千代に声をかけた。

「お千代さま、山に登ほらず、この道の先の山裾を探してみませんか」

「よしぞ」と千代は立りあがり、軽快に先へ歩いた。と、半町ほど進んで立ち止まり、

「じゅんじゅん、これは、なんのはなじゃ」

左手の、落ち葉の山斜面を指差した。そこには径

一寸ほどの白い花が五つあまり開いている。周りに目をやれば、ほかに似た花がそこらに群れている。小十郎は白い花を注意深く見た。花びらは柿の種を長細くしたような形だ。

(数は八つ、いやまで、十の花びらもある)

(初めて見る花だ。なんという名だろう)

小首をかしげた小十郎に千代が、

「わからぬか。なら、しるものは、おらぬか」

「伊吹庄左衛門さまなら、ご存知かと」

「しよつとえもん？ おっ、いっぞや、このやまであった、おじいじゃな」

「はい。本草学者さまです。お千代さま、庄左衛門さまにこの花の名を訊ねてみますか」

「みつけたのに、なが、わからんでは、つまらん。

「じゅんじゅん、おじい、きじつ」

「承知いたしました。では、まいりまじょう。お千代さまも」一緒」

### 庄左衛門屋敷

桜木小十郎は白い花の一輪を地面よりそっと引き抜くと、懐から折りたたまれた手拭いを取りだし、間にはさみ、また懐に納めた。

伊吹庄左衛門の屋敷は、齋藤又右衛門道場から北西に八町ほど行った大國町にあり、周りは田んぼだ。田植え前、田に水を張れば、四方をマサキの生垣で囲んだ家屋敷が浮き城、とき景色となる。小十郎は酒席の父桜木十郎兵衛の迎えで、これまで二度訪れていた。

東の生垣にある透し門を、小十郎に続いて千代も入ると、四間間口の二階家の玄関先を竹箒で掃いていた前髪姿の若侍が、「どなたでござるか」と声をかけた。小十郎が、

「わたくしは、庄左衛門さまに教えをいただいた桜木十郎兵衛の子、小十郎と申します。愛宕山で見つけました花の名を庄左衛門さまにお教えいただきた

く、突然で失礼とは存じましたが、参りました。こちらは、わたくしが剣の代稽古を行う齋藤道場のお孫、千代さまです」とあいさつすると、若侍は、「おお、十郎兵衛さまの」子息でござるか。お師匠さまはご在宅です。しばしお待ちを」

と応えて母屋の右に建つ、二軒長屋ほどの平屋へ向かった。そして玄関障子戸の前で、

「お師匠さま、桜木十郎兵衛どのの」子息小十郎どのがお見えです」

と声をかけると、ややあって障子戸がゆっくりと引かれ、ほっそりした初老の武士が姿を見せた。小十郎は身を正して会釈し、

「庄左衛門さま、過日愛宕山でお会いした桜木小十郎です。本日お千代さまと愛宕山に参りましたところ、白い花が群れ咲いておりました。お千代さまにその花の名を聞かれましたが、わたくしは初めて目にした花であり、お応えできず、洲浜草をお教えくださった庄左衛門さまならご存知であろうと、あつかましくも参りました次第です」

と申し、懐から折りたたんだ手拭いを取り出して、

庄左衛門の前で広げた。

東一華？

伊吹庄左衛門は桜木小十郎が広げた手拭いを見た。そして、ふむふむと小さくうなずき、

「小十郎どの、嬢ちゃん、まあ、中にお入りなされ」といって、先に玄関を入った。小十郎が手拭いを懐に納めて続き、千代は中を覗き込むようにかがんで入り、履物を脱いだ。部屋はひと間で、畳の八畳と奥に二畳分の板張り。板張りには壁に添って天井までのびた薬筆筒のような柵がのつていた。柵の前に横長の文机が一つ。硯、筆、帳面などが置いてある。柵へと進んだ庄左衛門は振り返り、

「机の脇布団におすわりなされ」

と小十郎と千代を促し、柵から小筆筒の一つを抜いて文机に置いた。墨筆で「春」と書かれた付箋が貼られている。庄左衛門がいった。

「先ほどの花と同じ絵が、この中にござる。お探しくだされ」

小十郎は小筆筒の中にある半紙の束を見た。墨の筆で絵と文字が描かれている。

「これは庄左衛門さまが描かれたものですか」

「さよつ。花や葉や根の形を観察してな」

「たくさんありますね。福寿草、繁縷、薺、紅梅、馬酔木、猩猩袴……」

半紙に記された草木の名を読みながら、小十郎は目線を絵に移して確め、千代にも見てもらうため一枚一枚千代に手渡した。

「……八つ手、沈丁花、東一華。おっ！」

小十郎の手が止まった。そして、

「お千代さま、これ、これです、この花です」

というや懐から手拭いを取り出し、花を見せた。千代は手拭いの上の白花と半紙の花の絵を見比べ、声を上げた。

「まごじや。みつけたな、ごじゅうさつ」

喜々として小十郎は「庄左衛門さま、東一華でした」と告げた。すると、「そうかな、まことにアズマイチゲかな」との返事。

「んっ」と、いぶかった千代は再度、手拭いの花と

半紙の絵を見比べた。そして、

「あっ、ちがつ、はのかたちがちがつ」

本草字

「ふおっ、ふおっ、ふおっ、嬢ちゃん、正解じゃ」

庄左衛門は嬉しそうに応じた。それから、

「小十郎どの、なまじ紙をめくれば、きつと手拭い上の花があらわれますぞ」

と教えた。小十郎は草木名を読むことなく、千代に紙を手渡すこともせず、すばやく紙をめくった。そして「おっ」と手を止め、

「これだ。菊咲一輪草。葉も花も実物と同じだ。お千代さま、ちがいないと思います」

というと、その紙を千代に手渡した。

「そつだ、キクザキイチリンソウじゃ。別名、キクザキイチゲとも呼ばれる春の花じゃ」

と庄左衛門は小十郎の労をねぎらうかのようによさしく口にした。

「花が同じに見えても、キクザキイチゲの葉は深く

裂け、アズマイチゲの葉は深くは裂けぬ。そんな僅かな違いでも本草字ではまったく別の種じゃ。細かな観察が要るわけじゃ」

「おしい、すじいな。かみさま、みたいじゃ」

「ふおっ、ふおっ、嬢ちゃん、字の読み書きを覚えたら、遠慮なくここにおいでなさい。小筆筒の中身を残らずお見せいたしますぞ」

「ありがとうございます。でも、ちよはくさきの はなでなくおてんきうらないを、しりたいな」

すると庄左衛門は立ち上がり、後の柵から「観天望気」の付箋がついた小筆筒を抜いて文机に置いた。覗いた小十郎は息をのんだ。紙束のいちばん上の紙に細かな筆文字で、

【信濃の國】

朝虹は雨

雨がえるがなくなると雨

朝霧りは日中はれ

……………

とあったからだ。

「すじい。庄左衛門どの、これはいかようにしてお

集めになられましたか」

「信濃は、採薬の折に土地の者に尋ねてな。他国は、本草学の仲間に教わった。いつか嬢ちゃん役になつたらば、うれしいのう」

信濃の庄左

桜木小十郎は伊吹庄左衛門に訊ねた。

「庄左衛門さま、先ほど庭を掃いていた若者は、いかなる方でございますか」

「あれは佐野真之介と申して信州山野辺藩目付佐野監物どのの三男坊じゃ。薬草を学びたいと参つたので草の見分けや採取法、成分、効能など教えて四年になる。十分自立できるのだが、今は真之介が唯一人の内弟子でな。真之介がおらぬと炊事や洗濯の世話をしてくれる者がいなくなる。独立しては「まる」

いって庄左衛門が笑った。すかさず千代が、

「おじい、ちよの やしきみたいに すみこみの おてつたいを やとえばいいぞ」

と教えた。庄左衛門は軽く頭をたたいて、

「うむ、真之介が独り立ちをねがった折りには、深川の口入れ屋に出向くとしようぞ。まずは一日も長く留まることを祈るばかりだ」

聞いて小十郎が口を開いた。

「庄左衛門さまのお名は知られおります。お弟子志願の者は多いのではありませんか」

「世間では『信濃の庄左』というところそうじゃな。わしの師、大丸屋吉兵衛さまは四十で嫡子に信州上田の呉服商を譲り、京は衆芳軒で小野蘭山先生に師事されたお方でな、薬草調査と実物観察の大切さを先生に学ばれた。上田に戻られても蘭山先生の教えを守り、国元の山で薬草の採集と観察を続けられた。のちに弟子入りしたわしは、必然、吉兵衛さまと」

一緒に信濃の山々を巡つたわけじゃ  
「それゆえ、信濃の庄左でござるか」

「まあ、信濃の薬草だけは詳しいといつことだらう。だが、他国の薬草を知らぬゆえ、数多くの薬草を学びたい者にはわしの話はもの足りぬようぞ、じきに去つてゆくわい」

「真之介どのの四年もおられるとか」

「彼は今、この小筆筒の中身を書き写しておる。図絵には薬草の採集地も記しておいたから、信濃にもどつた折は大いに役立つ。亡き吉兵衛さまもお喜びなされることだらう」

そういつと、庄左衛門は顔をくすした。

黄蘗（キハダ）

大人二人の話に千代が口をはさんだ。

「おじい、おじいのやしきは おおきくりつぱじゃなあ。ひろい はたけも みえたぞ。おとのさまのおやしき みたいじゃな」

すると、伊吹庄左衛門はワハハと笑つて、

「お殿さまのお屋敷とはお殿さまに失礼じゃ。この美寿々寮は吉兵衛さまが江戸に滞在する折の屋敷として建てたものでな。畑では薬草を栽培し、それを薬種問屋に売つておる」

薬草を売ると聞いて小十郎は尋ねた。

「さきほど大丸屋吉兵衛どのの呉服商とお聞きしました。薬草販売もなされたのですか」

「京の衆芳軒から郷里の上田に戻つた後にな。太郎山の麓に庵を編んで、近くの山の一つを買い取り、全山を薬草園となされた。そこに植えたは唐桃、山菜蕒（サンシュユ）、核太棗（サネフトナツメ）、槐などの樹で、もっとも多く植えたのが黄蘗（キハダ）じゃ」

キハダときいた千代が意気込んだ。

「きはだは にがいぞ。ちよが はらいたをおこしたとき ははうえが きはだをせんじて のませたぞ。はらいたは なおつたが ものすこまゝ にがかった。もう のまん」

「そうじゃな、黄蘗の内皮はすこぶる苦い。しかし、胃腸の妙薬。大和の陀羅尼助、信濃の百草もそれじゃ。吉兵衛さまは山の中に水路を設けて沢水を回し、実生のキハダを育てた。それらが大きくなるまでは、山に自生した黄蘗の木を伐つた。十年もすると実生の木は高さ六間ほどに育ち、毎年大量の黄蘗内皮がとれたから、江戸の薬種問屋との商いも手広く盛んになつたそうじゃ。その貯財で、この美寿々寮が造られたと聞いておる」

とたん、千代が目を輝かせた。

「なら」「このいえは きはだやしきか」

「黄蘗屋敷とは、嬢ちゃん、うまいことをいう。吉兵衛さまはキハダの薬効が多くの人に役立つことを欲しておられたから、」こが黄蘗屋敷とよばれるは、「本望かもしれん」

庄左衛門はしばし目をとじた。

美寿々寮

しばらくして目を開けた伊吹庄左衛門は、話を続けた。

「わしが十四歳で吉兵衛さまに入門して三年が経ったとき、吉兵衛さまは、それまで上田の山の薬草園で共に働いてきた下男の留吉に、薬草園の管理運営の一切を任された。黄蘗の育成と内皮の販路拡大に目鼻がついた時ではあったが、思いきったことをなされるとわしはおどろいた。思うに吉兵衛さまはそろばん仕事を離れて薬草採集の現場に戻り、蘭山先生の教えを实践したかったのじゃろう」

その五年後の秋のことだ。美寿々寮と薬草園を任されていたわしの兄弟子、酒井修理どのが若死されてしまった。ために吉兵衛さまはわしに酒井どのの後を頼むと申された」

「それはいかほど前のことか」

「三十年になるかのう。わしは二十一じゃった。正直、吉兵衛さまのもとを離れたくはなかった。が、師は、『江戸には酒井修理の友も含め、多くの本草学者があるぞ。交わればきっとお主の世界が広がる。寮にそれらの人々を呼び、互いの研究を語り合つても、おもしろいではないか』とおっしゃった。それがわしにはたいへん魅力的だった。

寮の薬草園は近在百姓の男衆女衆が種まきから収穫まで手伝ってくれており、彦兵衛という通いの年寄りが薬草の仕分けや搬送の全てを承知していた。彦兵衛はそろばんもできたから、わしの主な仕事は彦兵衛のお手伝い。そして訪れる本草学者の相手じやったな」

「下世話（げせわ）ですが、手伝い百姓らの給金はどなたが支払われていたのですか」

「美寿々寮は独立採算でな、寮を預かるわしが全てを決めてよかった。損をださぬよう、手伝うものに無理を強いぬよう、やりくりするのだが、ここの薬草は評判がよく、手伝い衆の給金に余禄をつけてやれるほどじゃ。寮の大屋である吉兵衛さまには毎年の暮、わしが太郎山麓の庵に家賃の十両を持参したわい。吉兵衛さまが亡くなられるまではな」

梁山泊

千代がふしぎそうに庄左衛門に訊いた。

「きちべえさんは なぜ しんだの？」

「労咳じゃ。不治といわれる病じゃ。山歩きを重ねた丈夫なお方であったか、晩年は激しくせき込み体は衰え、うつり病ゆえ、そばで最後を見取る者なく亡くなられたそうだ」

「うめん、うらいに」と おもいださせたまな」

千代がうつむいた。小十郎が訊いた。

「吉兵衛どのの亡き後、庄左衛門さまは、いかがなされました」

「吉兵衛さまは遺言状を書かれておった。驚いたのはその内容じゃ。一つ、太郎山麓の庵と薬草園は、留吉に譲る。一つ、美寿々寮と薬草園は伊吹庄左衛門に譲る。庄左衛門は本草学をさらに広めよ、とあったのだ。あまりの温情にわしは胸がつまった。そして亡き師に誓った。志を継ぎ、本草学を広めると」

「いかようにして広めなされた」

「わし一人が山野で薬草探索を続けても本草学を広めることにはならん。それと考えたとき、幸いなことに吉兵衛さまがわしに遺された美寿々寮と薬草園があった。これを本草学を志す者たちに開放しようと考えたのだ。

そこで薬種問屋を通して『美寿々寮の薬草園を手伝え本草学が学べるぞ』と志望者を集めると、早速老若の七名がやってきた。わしは彼らを寮に住まわせ、課題を課した。それは毎月の十五日に、薬草園にての薬草観察、あるいは寮の蔵書から学んだ知識を他の者の前で順に発表すること。その発表会には寮外の者も参加でき、質疑応答にも加わられるとした。すると数年経たたぬうち、美寿々寮は本草の

梁山泊とよばれるようになった」

「おい、りゅうごうたばくとは、なんじゃ」

「嬢ちゃんにはむずかしいなあ。簡単にいえば、志を同じくするものが集まった場所じゃ」

「それは、すこいことなのか」

「すこいことじゃ。多いときは他所から十数人も集まり、議論し、互いに学識を広げたのだからな」と庄左衛門は懐しそうに口にした。

#### 信濃本草学

伊吹庄左衛門は続けた。

「最初に美寿々寮にきた七人は薬草の知識と実技を学び、短くて三年、長くて七年でそれぞれ自立できる自信を得て寮を出た。わしは、彼らの郷里の藩に薬草園があれば、藩宛ての推薦状を書いて持たせた。無き者は、自ら薬草園をつくるよう、薬草の種を分けた。

美寿々寮に寮生がいなくなった月の十五日のことだ。それを知らぬ数人が集まりきてな、寮生がおら

ぬならわしに薬草の話をしてくれという。そこでわ

しは吉兵衛さまと信濃の山で採取、観察、記録したものを話した。つまり、この小笹箭の中身のことじゃ。その噂を聞いて、本格的に弟子になって学びたいという者が訪れた。だが、先に話したとおり、そういう者には、わしの話はもの足りなかったわけじゃ。なにせ信濃の庄左じゃからな」

と庄左衛門は自嘲ぎみに口にした。小十郎は庄左衛門の目を見て口を開いた。

「庄左衛門さま、わたくしは『信濃の庄左』のあだ名を誇らしく感じます。たしかに数多くを知ることはずばらしきこと。あっぱれなことです。さりながら一つをきわめるもすばらしいと思います。大丸屋吉兵衛どのはその信濃という土地で実践され、庄左衛門さまに引き継がれた。聞けば真之介どのの小笹箭にある庄左衛門さま研鑽の成果を書き写され、帰郷しては実地に確認してゆくとか。これはまさに、信濃本草学の継承でござる」

「小十郎どの、吉兵衛さまが祖の信濃本草学とは嬉しいことをいわれる。ならば、三代目真之介にはこ

の屋敷と薬草園を継いでもらわねば。薬草の栽培や収穫、出荷は彦兵衛亡き後、大國東町の真吉が仕切りある。真之介が郷里に帰っても障りはない。よし、決めた。真之介に渡す。小十郎どの、嬢ちゃん、今日はよくきてくれた。ここらから礼を申す」

翌年七月、伊吹庄左衛門が他界。美寿々寮を継いだ佐野真之介は山野辺藩に薬草園を設け、若者二人を薬師に育てるのであった。